

## 「危機の時代にあつて 過去と未来をつなぐために」 〈新型コロナウィルス禍の最中で〉

人間科学研究所所長

森 茂起

人間科学研究所では、二〇二〇年度より、新しい研究事業「過去と未来をつなぐ危機の乗り越えに向けて」（三年間を予定）を開始しています。二〇一九年度まで四年間続けてきた事業、「現代人の心の危機に関する共同研究（Phase 5：過去と向き合い、未来を創る）」を受け継ぎながら、研究活動を次の段階に進めるための事業です。

ただし、新型コロナウィルスの感染拡大によって、計画されていた事業の多くが延期、オンライン開催への移行などの変更を余儀なくされました。大学、研究所その他の多くの機関が経験した事態と思われませんが、人間科学研究所の事業には、対面で接することが必須の子育て関連事業やインタビューが多く含まれており、それらをどのようにしてオンラインの形式で行うかを検討しながら、実現してきました。これも新しい経験として、今後の活動の形を検討していきたいと考えています。

昨年私は、この巻頭言と同じタイトルで巻頭言を書きました。通常は、新しい年度の活動に即して、タイトルも内容も変えるのが適当ですが、あらためて昨年度の巻頭言を見ますと、その内容が今こそ重要性を増していると感じます。そこで、新しく書き下ろすよりは、副題を加える以外タイトルを変えず、昨年の内容を大幅に取り入れながら編集する形で今年の巻頭言とすることにしました。その方針を念頭にお読みいただければ幸いです。

研究所は開設以来、「現代人の心の危機」をテーマとして活動してきました。臨床心理学と人文諸科学の共同体制によって設立された人間科学科および人間科学専攻が母体となって実施した「心の危機」研究がその源にあります。地域を襲った阪神淡路大震災からの復興が課題であり、また、精神医学、心理学で「トラウマ（心的外傷）」の概念に光が当たった時代でもありました。二〇二〇年度から三年間の予定で進める本事業も、「危機の乗り越え」をその目的としています。

実を言いますと、過去の研究事業の進行の中で、「危機」ではなく、より肯定的な響きの言葉を主題にした方が良いという意見が出されたことがあります。肯定的側面に注目する研究者は、「トラウマ学」の中にも存在し、トラウマ＝傷よりも、それに対する「レジリエンス＝回復力」、トラウマ後の「成長」、予防や回復のための「資源（リソース）」などを重視しようとする。

します。それらが重要な視点であることは間違いありません。ただその一方で、肯定的な側面への注目は、危機の認識を甘くする危険をはらんでいると私は考えます。危機を十分認識した上で、それを克服する力に注目するのは良いのですが、危機の理解が薄い段階で肯定的側面に目を向けると、危機の認識が回避される恐れがあります。なんとかなるといふ感覚が危機意識を弱めるのです。

甲南大学のキャンパス内に、「常に備へよ」の言葉を刻んだ碑があります。地域を襲ったもう一つの大災害、阪神大水害後に、学園の創立者、平生夙三郎が語った言葉です。そこには危機はそもそも認識しにくいものであるという洞察が込められています。

研究所設立の契機となった阪神淡路大震災から四半世紀が過ぎ、いわゆる記憶の風化も感じられる現在ですが、二〇二〇年度に起こった様々な事象を見ますと、危機に対する認識と備への必要性がますます高まっています。二〇二〇年度からの研究事業に組み込んだ「危機」といふ言葉の意味をあらためて噛みしめながら事業に組み込んで参りたいと思います。

研究計画においては、研究所の主題を三つの柱に整理しています。(1)「社会による子育て」ソシヤルペダゴジー」の概念のもとに進める、「子ども・子育て」に関する研究・実践、(2)トラウマ(戦争、災害、虐待、暴力等)、人生史、記憶を

対象にした、思想、心理学、アート、歴史、社会学などによる学際的研究、(3) 人間科学の哲学的・思想的基盤を検討する研究、の三つです。

(1)は、研究所がその設立時から継続して取り組んできた主題です。「ソシヤルペダゴジー」とは、およそ「社会による養育」、近年厚生労働省のワーキンググループが作成したビジョンが用いる「社会的養育」に近い言葉です。「子ども・子育て」の主題もまた、少子高齢化が進む中で、社会が抱える危機と関係しています。二〇二〇年度までに行なってきた子どもおよび親子を対象とした実践活動の発展的継続と、兵庫県の「ひょうご子ども・子育て未来プラン」と連携した研究がその中に含まれます。後者には、文学部(人間科学科、社会学科)、マネジメント創造学部、経済学部、経営学部の各学部に所属して、「子ども・子育て」関連の研究、実践を行なっている研究者が参加し、学際的に現在の子どもや子育てが置かれている課題を理解し、それを解決する方策を検討しています。また、研究成果を生かして二〇一九年度から開講された「ライフプラン教育」の実践的研究を行っています。

(2)に掲げる「トラウマ」も、阪神淡路大震災以来、研究所が継続的に扱ってきた主題です。戦争、災害、虐待、暴力等の様々の破壊的な出来事を私たちはどう受け止めるのか、そこからどう回復、復興するのか、また、それらの出来事をどう予

防するの、といった様々の段階や側面に渡る研究を行っています。思想、心理学、アート、歴史、社会学といった専門家の共同によって、研究、実践を進めていきます。この主題に関連する「人生史」、「記憶」に焦点を当てた研究も行っています。

(3)では、哲学・思想分野を有する研究所として、人間科学の基礎付けを行うことを課題としています。一つの具体的な研究主題として、甲南大学の財産である九鬼周造文庫を生かした九鬼周造研究に取り組んでいます。

以上の研究主題は、いずれも危機を見据えながら、過去を未来につなげていくことを目指すものです。地域の専門家、(子どもを含む)市民に開かれた研究所として活動してまいりますので、研究所の活動へのご支援、ご参加をいただければ幸いです。本紀要は、研究員の研究発表の場として、研究所が開催したシンポジウム等の成果公表の場として、役割を果たしていきます。甲南大学機関リポジトリに登録されていますので、国内外から閲覧していただけるよう内容を充実させていきたいと考えています。

(もり しげゆき)